

教材研究と教材の扱い方 (9)

——枕草子第二百九十九段「雪のいと高う降りたるを……」——

菅原敬三

枕草子第二百九十九段「雪のいと高う降りたるを……」を取り上げる。一般的には、「香炉峰の雪」として人口に膾炙した章段であり、教材としても根強い人気を持っている。本文は次の通りである。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめり。」と言ふ。(岩波書店『古典文学体系』)

枕草子には、こういう中宮定子からの謎掛けの言葉(と一応は取っておく。詳しくは教材研究の所で述べる)が他にも見受けられる。「一乗の法」で有名な第一百一段もそうであるが、この時中宮定子は清少納言に向かつて、「思ふべしや、否や、人第一ならずはいかに」と問い掛けている。謎解きであるだけに中宮定子の問い掛けはいつも突然であるが、知的ゲームを楽しむという点に、また人から評価されるとはどういうことかに注目すれば、現代の我々にも十分に楽しめる章段であり、教材としての価値も十分である。

一一

次にこの教材の教材研究を進めてみたい。
中宮定子と清少納言との関係については、衆知のことと

思われるのでここでは省略する。謎掛けと謎解きができるためには、謎を掛ける側と掛けられる側の間に信頼関係が成立していなければならない。

この章段の成立時は萩谷朴氏によれば、

この逸話の史実年時がいつであるかは不明。清少納言が宮仕えにようやくやくなれて、かつ中宮がその才能を發揮させようと誘導していられた頃の降雪というところ

『小右記』長徳元年正月二十八日条に「時々飛雪」と見える正暦五年晩冬から長徳元年早春の間の登花殿でのことか。(新潮日本古典集成『枕草子』下 第二百八十段、頭注)

とされている。清少納言の初宮仕えは正暦四年(九九三年)と想像されているので、宮中に出仕して一年余り経った頃の話である。「宮にはじめてまゐりたる頃、……」の初々しい清少納言とは違って、一年余りで中宮定子の信頼を一身に集めてしまったのである。

*

まず、本文の言葉の説明に移りたい。

「雪のいと高う降りたるを」は、『小右記』の記事「時々飛雪」を根拠に考えると創作のように見える。しかし、その点を説明することが教材研究の目的ではないので、清少納言の文章を尊重することにする。「例ならず」は、「いつものようでもなく(小学館、日本古典文学全集)」

「いつもより早く(新潮日本古典集成)」の意。

「御格子まゐりて」の「まゐる」は格子を上げる場合も下ろす場合も用いるが、文脈からいって「格子を下ろして」の意である。つまり、雪が高く降り積もった日でも、いつも格子を上げていたということになる。寒さを厭わず何の目的で格子を上げるのかといえば、昼間の明かりを取るために上げるか、雪見を楽しむためかのいずれかである。

「物語などして集まりさぶらふ」とは「話などしながら女房みな中宮様のお前にはべっていた時」の意。「話などしながら」とは、朝、女房が身支度を整え自室から出て中宮の御前に伺候してしばらく時間の経ったことを表している。

「香炉峰」は、『白楽天詩集』卷十六「香炉峰下に新たに山居を卜して草堂初めて成り、偶東の壁に題する五首」のうちの第四首に「日高ク睡足リテ起クルニ慵シ。小閣衾ヲ重ネテ寒ヲ怕レズ。遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テテ聴キ、香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル。匡廬便子是レ名ヲ逃ルルノ地、司馬仍ホ老ヲ送ルノ官成リ。心泰ク身寧キハ是帰ル処、故郷独リ長安ニ在ル可ケムヤ。」とある。

「さること」とは「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」ことを受ける。

次の「人々も、『さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。』」の部分、かなり難解である。

「さること」とは「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」という箇所を受けている点で、ここには問題は無い。「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」位の漢文の教養は女性でもあるという意である。しかし、次の「歌などにさへ歌へど」が問題なのである。「歌」が、一般的に「和歌」として解釈すると、「さへ」とわざわざ付けたからには、和歌の素材として香炉峰が広く定着していなければならぬ。しかし、勅撰集の中には香炉峰を詠み込んだ歌は一首たりとも出てこない。「歌などにさへ」とわざわざ「さへ」と付けた意味が出てこないのである。どのように考えられるのか、問題点は後述する。「なほ、この宮の人にはさべきなめり」の部分は、研究者によって解釈が異なっている。「やはり、この宮にお仕えする人としては、うってつけの人であるようだ」（小学館、日本古典文学全集）というのが一般的だが、一方「諸注はことごとく、清少納言のことを『中宮に仕える人としては、適当な人のようだ』と評した」と評しているが、それでは、古参女房たちの反省の言葉とはならない。傍注したように、「さべきなめり」という原文に忠実に逐語訳すればよい」（新潮古典集成・萩谷朴）として「やはり、この宮にお仕えする人としては、そうあるべきなのでしよう」と訳している。萩谷氏と他の諸本との解釈はかなり異なる。萩谷氏は「いつもより早く御格子をお下げして、（女房達は）話し合ったりして伺候していると、

中宮が『少納言よ、香炉峰の雪いかならむ』と折角の雪景色なのに格子を閉め切ってしまったから婉曲に注意されるため言葉を掛けられたのだ」とし、次いで古参女房達の言葉が続いて、「やはり、この宮にお仕えする人としては、そうあるべきなのでしよう」と解釈されている。

解釈の違いは、一概にどちらがいいとは決めがたいが、多様な解釈があることは知っておく必要がある。その上で多様な解釈を生かした教材の扱いに注意しなければならぬ。

三

教材研究を進めることにする。事の起こりは、中宮定子の「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」という発言によるのだが、この章段を分析するためにはそれより前の状況を押さえておかねばならない。

まずは「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」にその問題点がある。本文に書かれているとおり「雪のいと高う降りたる」場合には、雪を觀賞するために格子は上げておかねばならないのだが、寒気がきつかったのかこの日に限って「例ならず」格子が下ろされている。この格子を誰が下ろしたのが問題なのだが、謎解きとしては中宮定子が誰か女房か女官を使って下ろさせておいた

とする方が面白い。「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」のように「簾ヲ撥ゲテ看」ようとしても、格子が下ろされてい
ては雪は見えない。格子を自分で上げに行き、その後また
簾を上げて雪を見るのでは、その格好を想像するのでさえ
滑稽である。簡単に雪見は出来ない、「さあ、どうする」
という謎解きのハードルを二重に設けたとするのである。
しかし、こういう解釈をとっているのはどの注釈書にも見
受けられないし、少し穿ちすぎのように思われる。「例な
らず御格子まる」ったのは、よほど寒気が厳しかったのか
女房の誰かが下ろしたと読むのが、文脈のリズムからして
自然であろう。その格子が下ろされているのを中宮定子が
見咎めて「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と声を掛け
た。

ここで考えておかなければならないのは、中宮定子が他
の女房ではなくなぜ清少納言に声を掛けたのかということ
と、なぜ「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」という言葉
を選んだのか、という二点である。

中宮定子が最も欲しいのは、雪見のできる状況である。
そのために「格子と簾を上げなさい」と直接的に声を掛け
るのは無粋そのものとなる。一つの呼び掛けに二つの作業
が出来る者は誰か、女房の中から人選をすると清少納言に
なったというのが妥当なところであろう。それが「少納言
よ」という呼び掛けになったのである。また、「香炉峰の

雪」を出すことによって、一度に格子と簾が上げられ雪見
が可能となる。「香炉峰の雪」を話題として出し、清少納
言を人選した中宮定子の教養と人を見る目確かさに、我々
は注目しておく必要がある。

一方、清少納言が中宮定子の言葉をどのように受け取っ
たか、このことも考えておかなければならない。清少納言
の動作は短く「御格子上げさせて、御簾を高く上げたれ
ば」とだけ書かれている。しかし、この動作の中に彼女の
判断が含まれている。もう一度「御格子上げさせて、御簾
を高く上げたれば」に注目したい。「御格子上げさせて」、
その後「御簾を高く上げ」たのである。「御格子上げさ
せ」、「御簾を高く上げ」たのは誰であるかが問題になる
が、清少納言と考えるのが自然である。萩谷朴氏は、諸注
を検討した後次のように述べている。

その上、歴史的基準を適用すれば、当時の階級意識
から言って、通常は女房という高級女官が、格子を上
げるなどという労働に携わることにはなかった。第八十
二段、雪山の段において、長保元年正月二日未明、斎
院から使者のあった咄嗟の場合には、清少納言と雖も
身分を意識せずに、重い格子を一人で上げるような例
外もあったが、通常は、格子の上げ下ろしは、掃司の
女孺の役目である。

まして「論説」の項に説くように、本段の史実年時

は、清少納言が宮仕えして、漸く一年を過ぎた正暦五年晩冬から長徳元年早春の事に属する。同僚もしくは下僚の女房にわざわざ簀子敷へ出て行って格子を上げさせるほどの権力を、清少納言はまだ持つてはいない。

(「枕草子解環 五 同朋社出版 一九八三年十月」)

つまり、文脈上からも読み取れるように、また萩谷朴氏の言葉にもあるように、清少納言は女官に格子を上げさせ、その後自分で「御簾を高く上げ」たのである。「御簾を高く上げ」る動作だけを自分で行い、内容としては中宮定子の二つの要求に応えたということである。「白氏文集」の「遣愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テテ聴キ、香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」動作は、居ながらにして風流が楽しめる状態を喜んで表現である。それを踏まえると、風流を楽しむためには自分では「御簾を高く上げ」る最低限の動作が望ましいという判断が清少納言にあったのであろう。要求に応えた清少納言の見事さに中宮定子の満足の気持ちだが、「笑はせたまふ」という反応になったのである。

二人のやり取りを見て女房達は「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめり」と感心と反省の入り交じった言葉を発するのだが、この言葉の解釈が厄介である。「さることは知り」の部分は前述したように「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」を受けている。「歌などにさへ歌へど」以下の

解釈が難しいのである。前述したように「歌などにさへ歌へど」の「歌」は従来和歌と考えられてきたがそう考えることは難しい。とすると、漢詩の朗詠と考えるのが自然であるが、その時には誰が朗詠するのか、主語が問題となる。「さることは知り、歌などにさへ歌へど」とスムーズに流れている文脈に注目すると、その主語は「人々」つまり「女房達」となる。「さへ」を付けるほど一般化した形で、女性が漢詩を朗詠していたと考えざるをえないのだが、果たしてそうであろうか。宮中の簀子などを歩いている時や中宮の御前で、女房達が漢詩の朗詠をしているというのはどうも考えにくい。紫式部が漢籍の素養を身に付けていることを他の女房から妬まれて、男勝りな女性というイメージの「日本紀の局」と仇名された「紫式部日記」の記事を見ても、女性が漢詩の朗詠をするという姿は浮かんでこない。しかし、女性が全く朗詠しないかという点、そうではない。「源氏物語」「花宴」の巻で、源氏の朧月夜とが出会う場面では、朧月夜が和歌を朗詠している。本文を引くと、

「いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、『朧月夜に似るものぞなき』と、うち誦じて、こなたざまには来るものか。(源氏は)いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。」(新潮日本古典集成『源

氏物語』第二巻)

というものである。朧月夜が朗詠した和歌は大江千里の歌であるが、その頭注によれば、

「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くも
のぞなき」(『新古今集』巻一春上、大江千里)の第五
句「しくものぞなき」(まさるものはない)が、漢詩
文風な表現なので、「似るものぞなき」と、やわらげ
て言ったものか。

とされている。女性でも和歌の朗詠はするが、漢詩文風
のものは避けたということである。こういう事情を考慮して、
観点を變えて「歌などにさへ歌へど」の主語を男性一般に
置き換えるとうなるであろうか。その場合は「さること
は知り」と「歌などにさへ歌へど」の主語を變化させなけ
ればならない。つまり、「さることは知り」の主語は女房
であり、それに続く「歌などにさへ歌へど」の主語は男性
となり、「思ひこそよらざりつれ」の主語はまたもどって
女房となる。この場合「さへ」をわざわざ付けた理由は解
消するが、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひ
こそよらざりつれ」という自然な文脈は崩れてしまう。実
に厄介な表現である。

以上のことを踏まえて大胆に解釈すれば、「歌」はやは
り「和歌」と取り、「和歌」に歌うほど「香炉峰の雪」は
教養の素材として一般化していたため、「人々も、『さる
ことは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつ

れ。』という発言になった。かなり苦しいが、このように
解釈することも可能ではないか。

次の「なほ、この宮の人には、さべきなめり」の部分も
また、解釈に苦しめられる箇所である。解釈の違いは前述
したとおりであるが、一歩進めてこの言葉を発した女房の
気持ちを検討するとうなるか。「やはり、この宮にお仕
えする人としては、うってつけの人であるようだ」、「やは
り、中宮にお仕えする人としては適当な人ようだ」と解
釈する諸注の側に立つと、ここで述べられているのは、中
宮定子に仕える女房としてふさわしい教養を身に付けてい
るといふ、知的な資格に言及したものと考えることができ
る。また萩谷氏の「やはり、この宮にお仕えする人として
は、そうあるべきなのでしょう」といふ解釈の側に立てば、
中宮定子の言葉を受けて、人に「御格子をあげさせ」た後
に、自分で「御簾を高く上げ」た清少納言の動作は称賛に
値するものだと受け取ることができる。いずれにせよ、清
少納言の能力を称えた点では、異なるように見えて両者は
共通していることになる。

四

次に、教材の扱いをどのようにすれば良いのか考えてみ
たい。古典教材は現代に生きる学習者にとっては、風俗、

習慣やもの見方・考え方においてかなりの距離がある。従って、古典教材を扱うに際して次の点に留意する必要がある。

- 1 古典の時代の時代背景や風俗、習慣などについて、教師の側から説明しなければならぬものがある。
- 2 その作品の文学史上の位置や特色について、説明しなければならぬ場合がある。
- 3 文語文法や古今異議語、また言い回しなどについて説明したり考えさせることが必要となる。

以上のことは、学習者にとってはかなりの負担である。これが学習の障害となって、つまり原因となることは多い。また、このような知識的なことは、学習者だけでなく教師の側にもつまずきの原因となることも多いのである。形骸化した古典の授業の多くは、以上のような知識を重視しすぎた結果起こってくる。知識の伝授または知識の詰め込みに終始する時、古典学習の意義は見えてこなくなる。現代に生きる学習者が何故古典を学ばなければならないのか、学んでどうするのか等の古典教育の目標を教師自ら考えておかなければ、古典の授業はどうしても知識偏重にならざるをえない。

このようなハードルを乗り越えるためには、学習者が自ら解決する課題が用意されることが望ましい。その課題解決を通して学習者の人間認識が深くなったり、判断力が付

くのである。本教材の場合、登場人物は中宮定子、清少納言、女房達の三者であるが、それぞれに課題が用意できる。その課題は次の通りである。

- 1 中宮定子が「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と声をかけているが、その意図は何か。
- 2 1に関連して、何故相手が清少納言なのか。また、どのような答を用意できる女性が望ましいのか。
- 3 中宮定子の問いに対して、清少納言はどのような判断のもとに答えようとしたのか。
- 4 清少納言の行動を見て、女房達は清少納言の何を評価したのか。

このような課題を用意することは、読みの過程でどうしても本文に返らざるを得なくなり、言葉の意味や表現の意図を考えることを通して、学習者の言語感覚を養うだけでなく認識能力や判断力の育成を促すことになる。古典の教材は単に文化の伝承の名のもとに知識の伝達に終わってはならない。古典教材が現在に生きる学習者の生活の糧になることが必要なのである。古典教材の大きな特徴は、現代文の教材に比べて表現、内容両面にわたって典型的なものが多く、学習者の認識能力や判断力の育成には格好の教材となっているという点を我々は忘れてはならない。

五

授業の展開を発問・説明と板書などを具体的にイメージしたものを示してみたい。各項目は次のように示すものとする。

発問・説明 …………… (発問・説明)

指導上の留意点 ……………

板書 …………… (板書)

教師の活動 …………… T

学習者の活動 …………… P

として示すものとする。

〔導入〕

導入部で注意しなければならないのは、「学習目標（指導目標）の明示」と「扱う範囲を示す」ことである。この両者を明らかにしないと、授業は何をどれだけやってもよいという甘さを生むことになる。例えてみれば、学習者にジョギングのできる服装を用意させておいて、走る目的も距離も明らかにしないまま走らせることに似ている。

1 「学習目標を明らかにする」

(発問・説明)

T 「きょうは、枕草子の第二百九十九段『雪のいと

高う降りたるを……』を扱います。登場人物が三者

(三人)出てきますか、それぞれが何を考えて発言

・行動したのか、発言の意図と判断の内容を探っていきます。」

・ 「学習目標（指導目標）の明示」を行う場合、授業のねらいによって様々にその説明が変わってくる。詳しく言わなければならぬ場合もあれば、詳しく言い過ぎると授業の醍醐味が薄れる場合もある。両者を上手に使い分けることが必要となる。また学習目標（指導目標）は授業の最初に必ず言わなければならないという訳ではないが、授業展開の早い段階で明示することが必要である。

2 「本文を通読する」

(発問・説明)

T 「では、本文を読んでもらいますが、登場人物が誰で、どのような発言をし、行動を取ったのか、考えながら聞いてください。」

・ 「本文を通読」させる際注意すべきことは、通読とその後の作業とが結び付くように指示・説明を加えることである。また、読み間違いは直ちに訂正しなければならない。

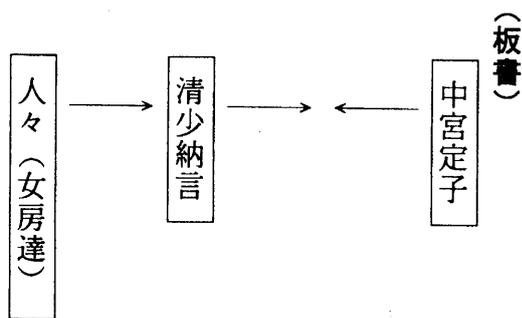
T 「では、登場人物を明らかにしてください。」

P 「中宮定子と清少納言と女房達です。」

T 「そうですね。中宮定子というのは、どこで分かってしまったか。」

P 「会話文のあとに『と仰せらるれば』とあります。」

T 「そうですね。『仰せらるれ』は二重に尊敬表現が用いられるのを、最高敬語とって、極端に身分の高い人の動作を表していましたね。では、板書で人物関係を明らかにします。」



• 板書を作る際に注意する点は、問題点を明らかにするのにふさわしい構造(基本構造)を作ることである。本文の場合、三者の関係がまず明らかになる

ことが必要である。

「展開」

展開部で注意しなければならないことは、「どこから」または「何から」問題点に迫っていくか、教師が「問題点への迫り方」に十分な配慮をし、工夫を施すことである。そして、学習者に「何が・どういふ点か問題なのか」を認させ、その課題を学習者が自力で解決するのだという自覚を育てることである。

(発問・説明)

T 「では、中宮定子の発言に A を、人々の発言に E を付けてください。そして、何故 B、C、D が無いのか、B、C、D に当たる部分は何なのかを考えて、板書の中でふさわしい箇所に記号を入れてみてください。」

• A、E などの記号を用いるのは、発言や問題点を把握するために有効であり、また、A から E に飛ばしたのは各人の行動を一度にとらえさせるための工夫である。A、E が板書にきちんと位置付けられるかどうか、学習者にとって最初の課題となる。

(板書)

中宮定子

D 笑はせたまふ

A 「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」

B (女官に) 御格子上げさせて

C 御簾高く上げたれば

清少納言

E 「さることは知り、歌などにさへ歌へど、

思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮

の人には、さべきなめり。」

人々(女房達)

(発問・説明)

T 「板書で基本的な構造が明らかになったところで、それぞれに含まれていた問題を明らかにしていきますよ。」

① A 発言に至った状況とは、どのようなものであったか。

② Aで何故「清少納言よ」と呼び掛けたのか。また、何故「香炉峰の雪」を持ち出したのか。

③ A に対して清少納言はB、Cの行動をとったが、そこにはどういう判断が働いていたのか。

④ Dでお笑いになった中宮定子の気持ちはどのようなものであったか。

⑤ Eの発言には、人々のどのような気持ちは込められているか。

が問題となります。分かったところからでいいですから、自分の考えを書いてみてください。

基本的な問いを示したが、これを具体的に展開するには学習者の実態に即したものにしなければならぬ。学習者の実態に即して、発問を易しくしたり、説明を加えたりしなければならぬ。

教師がきちんとした解釈を持つことは必要であるが、それを単に教授したり、提示したら良いというものではない。課題を解くのはあくまでも学習者であり、学習者の手助けをするのが教師の役割と考える方がよい。

学習者の持っている学力は、個人々人によって異なる。従って、学習者の学力や興味に応じて解決される課題が用意されることが望ましい。

①～⑤の学習課題は、順序を問わない。学習者の学力や興味に応じて解決させれば良いのである。

・ 学習者が学習に積極的になるためには、学習を通じて学習者が「発見の喜び」を味わうことが絶対的に必要となる。これが授業が充実するための要諦である。「展開部」の役割は、この「発見の喜び」を繰り返して学習者に味わわせることにある。

・ 学習者は自分の力で課題を解決し、その作業を蓄積することによって、自立した認識主体となっていくのである。授業は学習者が成長するために行われるのであり、決して教師の自己満足のために行われるのではないということを銘記すべきである。

「まとめ」

まとめの段階で注意すべきことは、学習課題に対して学習者がどの程度自力で解決できたか、学習者自身確認することが大切である。また、学習課題が学習者にどの程度有効に働いたか、教師自身確認することが大切となる。この確認作業が、次の授業の充実につながっていくからである。本教材の場合、次の説明を補っておきたい。

（発問・説明）

T 「以上で、①から⑤の課題が解決されました。しかし、これですべての問題が解決された訳ではありません。」

筆者がどういう目的でこの章段を書いたか、この章段を書くことによって、何を伝えようとしたかという問題が残っています。

事実だけを見ますと、中宮定子の問いに対して見事に応えたのですから、また、人々（女房）の称賛を得たのですから、清少納言の『我褒め』の章段として読めますね。しかし、それだけではなさそうです。『我褒め』以外の意味も見出せると思います。

人々（女房）の言葉に『この宮の人には、さべきなめり』というのがありますが、『この宮』という言葉に注目してもらいたいのです。この言葉には相手の人物、つまり『宮』に対する評価が含まれています。『これほど立派な中宮様』『これほど教養のある中宮様』という意味が含まれています。その『中宮様』に仕える人としては、『さべきなめり（そうあるべきなのでしょう）』という訳です。

つまり、この『この宮の人には、さべきなめり』という言葉の裏には、中宮定子を中心にした人々の集まり、これを『サロン』と名付けますと、この『サロン』の文化的なレベルの高さを読者に知ってほしい、または自慢したいという気持ちがあるように思います。文章には必ず執筆の目的というのがありますから、それを多方面から検討すると、面白い

問題が出てきます。

・ ここに上げた問題は、教師がまとめの段階で説明してもいいと思うが、学習者によっては、課題として設定する方がいい場合もある。学習者の実態に合わせて扱うことを心掛けたい。

まとめのサンプルとして、板書計画を示すこととする。

(板書)

状況 雪のいと高う降りたる …… 雪見に最適
格子・御簾の下ろされている …… 雪見不可

中宮定子

納得 雪見のできる状況出現
自分の要求をクリアー

D 笑はせたまふ

問い掛け (謎掛け) …… 香炉峰の雪
人選 …… 清少納言

A 「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」

B (女官に) 御格子を上げさせる

C 御簾を高く上げたれば

判断

(謎解き) ……

格子は女官に上げさせ
御簾は自分で上げる
(白氏文集を生かす)
(二重のハードルをクリアー)

清少納言

E 「さることは知り、歌などにさへ歌へど、

思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人
には、さべきなめり。」

称賛 …… 教養が身に付いている

人々 (女房)